

## 8 中津藩医山辺文伯と産育編に

ついて (一一)

石原 力

第一〇四回本学会総会、及び洋学史学会・日本医史学会関西支部合同二〇〇三年度大会で、山辺篤雅<sup>あつま</sup>文伯と産育編についての多くの不明な問題を取り上げ、解明できた事柄を報告した。右学会で蒲原宏氏より、山辺文伯という人物が播磨の姫路から移封された高田藩<sup>たかた</sup>神原氏の藩医に、吉益東洞門下生でいるが、同一人物かもしれないという追加があり、東洞全集で事実であることを確認した。また川<sup>かわ</sup>寫眞人氏より、中津の辛島<sup>かみ</sup>正庵が藩命で江戸藩邸の医官山辺文伯に産科を学び、安永二年(一七七七)学成り近習医師になった記録につき追加があつた。

今回は彼の著書産育編につき報告する。

『国書総目録』所蔵の彼の著書は前回述べたが、その後全部目を通した結果、『簡易効方』は安永二年(一七七

七三)の著作であり、『痘疹要訣』には年代の手懸りとなるものはなかった。東博の『傷寒論要訣』は一橋家徳川宗敬<sup>むね</sup>旧蔵本で、「播磨・山辺篤雅文伯撰」とあり、東洞の名がこれには出ないことから、東洞に入門した明和九年(一七七二)以前の著作であろう。なお『東洞全集』中の呉秀三による伝では、篤雅、字は君節、通称監司、播磨の人とある。

産育編の諸写本をその内容から、筆写時期でなく成立時期順に並べると以下ようになる。

① 東大総合図書館蔵旧青洲文庫本で、他本も共通の明和九年(一七七二)十月の序文があり、本文しかなく、原本の体裁を残す。巻中の末尾の文字、「天道好還」を「天道好道」に改めた頭注があるから自筆本ではない。

② 次も東大総合図書館蔵旧呉秀三所蔵の篤雅自筆校正本で返り点、句読点を付している。原本に目録、方薬の項、附録の図が追加され、凡例も後半を改訂、本文も何箇所かの追加があり、巻中には《<sup>イギリス</sup>諸厄利亞孕腹画図を觀るに、背面にして倒首》を挿入している。この増改訂本は附録の図の末尾に《寛政十戌年(一七九八)五月廿日

之を瀉す」とあり、原本から二六年も経過していることは、篤雅の本書に対する情熱と執念を思わせる。

③『日本産科叢書』所収、山縣昌蔵旧蔵現杏雨書屋本は、②と殆ど同一である。鉗子図の説明が②では両図とし雙鉸図であるのに対し、片方と偏「片」鉸図としているのは、篤雅の図に対する考察の進展を示す。

④国会図書館本は目録、方葉、附録図を有し、②と大体同じである。処が奥書に「天明五己（二七八五）十月中旬於東都浣花堂「篤雅の家塾」写之、米「沢か子」藩森順（太仲）」とあり、明治廿二年尾台良作より岡直（義夫）が借りて謄写した写本である。日付は②より古いことになる。しかし、（一）一三年後に写された鉗子図が入っていることは、②以後の成立でなければならぬ。 （二）凡例の附録治験の箇所、①②の「門弟子之所記之一二」を「阡陌中之一二」と改め、方葉の項では②にない葉の増補がみられる。（三）巻中の陰瘡の記事では、《時に痛み時に癢し》の頭注に、《一本は疼に作り、一本は痛に作る。不分明》とあり、①②③とも疼であることから、これらと異なる他本をも底本にしている

ことが知られる。また（四）鉗子図の説明を②のように共に雙鉸図とした後、片方を線で消し、隻「片」鉸図と③のように直しているのは、考えを変えた時点のものであることを示していると思われる。（五）また《鉄にて之を造り綿にて之を纏うこと図の如し》という説明文を新たに加えているが、これは鉗子窓の縁に薄いものを纏わせる Sonelle の原図に近づけたものである。以上の理由から、④は②より後に成ったと考えられる。

⑤東洋文庫蔵『産育論』は産育論のダイジェスト版で、書名の変更もそのためであろう。明治八年志田辨治が東京西川宅で写し、岡本辨治「同一人か」蔵とある。「雙鉸図、有二品。鉄造之、綿纏之」と鉗子図の説明にあるので、雙を隻に変える前の④からの写本であろう。

以上、産育編を、原本、自筆校正本、最終増訂本の三種に分類して検討した。

（賛育会清風園診療所）